

第4回 まちデザインシンポジウム

「アートは地域を変える～時代、フィールド、人～」

＜シンポジウム概略とその要旨＞

期 日：2010年10月23日(土)

会 場：柏商工会議所4F

時 間：13:30～17:00

パネリスト：中村政人氏、藤田とし子氏、山出淳也氏

コーディネーター：清水義次氏

【パネルディスカッション】

I. 山出淳也氏(NPO 法人 BEPPU PROJECT 代表理事)

「BEPPU PROJECT の活動」

①□ BEPPU PROJECTとは？

山出淳也…大分県出身。2004年に帰国。当時別府にはほとんど知り合いなし。

- 2005年～ スタート…活動拠点は大分県別府市

※別府は、温泉湧出量世界第二位の場所(毎分 95,167L)。

日本の源泉数の1/10が集中(2,847 井)。人口約 12 万人。

第三次産業従事者は81. 8パーセント。

- ビジョン…「アートが持つ可能性を社会化し、多様な価値が共存する世界を創造する」

- 団体について… 今年度予算:6000万円程度(大型事業は別会計になっている)

スタッフ:現在 10 名、新規事業開始に伴い、6名を新たに採用予定。

②「BEPPU PROJECT」の事業関係図について

グレーの部分が「中心市街地活性化に係わる事業」である。

③「BEPPU PROJECT」の沿革

- 2005年4月…「BEPPU PROJECT」発足

市内各地でアート活動を開始し、“市民主導型”によるアートフェスティバル開催をうたうマニフェストを設立する。

例)「宮島達男展」…世界的アーティストの展覧会実施

ダンス公演、ワークショップ…まちなかで実施

中村政人氏とゲストを招いての「トークイショー TABLE#2 美術と教育」は大盛況。リング上で行われた対談を、VJ、DJ がトークを盛り上げたり割って入ったりする、トークイベントとクラブイベントを融合させたスタイル。

(山出氏)…リングみたいところでやりました、このトークイベントは、大いに盛り上がりまして(笑)、アルコールを出したので、おかげさまで、黒字のイベントになりました(笑)。また、こういうのをやりたいなあと思っています…。

- 2006年11月…「アートNPOフォーラム」開催(別府に誘致して実施)

外の人々に向けての発信(全国の団体との協働の呼びかけを行う。)

全国のアート NPO や関係者に向けてフェスティバル構想を発表。

「混浴温泉世界」の組織基盤作りとなる…芹沢高志(別府現代芸術フェスティバル2009「混浴温泉世界」総合ディレクター/P3 Art & Environment エグゼクティブ・ディレクター)

佐東範一(別府現代芸術フェスティバル 2009「混浴温泉世界」ベップダンスディレクター/NPO 法人 ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク 代表)

(山出氏)…この段階では実は、フェスティバル構想は未定でして、この時はまったく計画が無かったという状態でした。構想を楽しみにされていた人にとっては、どういことだ!という感じになるんですが(笑)、僕はこの場では、アート関係者や団体の“協働”を呼びかけるという形で進めていけないかと考えていました…

●2007年・・・「創造都市国際シンポジウム」を開催

内の人々に向けての発信・・・行政・商工会議所・地域の公的団体と協働して、
クリエイティブシティについて考える場を設けた

「世界の温泉文化創造都市を目指して」・・・吉本光宏氏、チャールズ・ランドリー氏、別府市長等
多彩なゲストを招いてのシンポジウムの中で、「星座
型 面的アートコンプレックス構想」を発表する。

(山出氏)・・・街の中に文化的な活動を行っていきける場をどのように作っていくか、それらを
operate する人材の育成をどのように行うのかを、また人材の供給元となる大学が市内に3つ
あるので、彼らがどのように街と関係するのかをプレゼンしました・・・。

●2008年・・・「platform」整備事業開始。別府市商工課と事業を進める。

「星座型 面的アートコンプレックス構想」の一事業がスタートする。

“まちなかにアートをどのように分散させるのか”。

“星座のように分散する拠点は、地域に何をもたらすのか”

Platform が現在8箇所ある(Platform01～08 歩いて10分程度の距離間)

<具体的内容>

- ・ レジデンススペース(アトリエがある住まい)とギャラリーの開設 ←デザイン賞受賞
- ・ セレクトショップを起業(別府生まれの商品、作品を取り扱う専門店)
- ・ コミュニティカフェを OPEN(市民の集まる場所としての機能を持たせる・生涯学習支援)
- ・ 若手工芸家を支援するためのスペース確保と三世代交流サロン開設
- ・ まちなかインフォメーションセンター(地域情報を提供)設立
- ・ 雇用の創出と将来のための人材育成
例) おばあちゃんと若い世代を結ぶ「古着リサイクルシステム」(高齢者が運営)

(山出氏)・・・高齢者の方たちがもつ技能を活かし、若いお母さんたちが持ってくる着なくな
った古着を、おばあちゃんたちが縫い直したり、しみ抜きやクリーニングをしたりして、1着
100円で売り出したわけです。これは特に私がアイデアをだしたわけではなく、そこにいる
おばあちゃんたちが考え出しました。これが意外にも好評で、高齢者と若い世代の交流に
なったわけです、また、子供たちが壊れたおもちゃをもってきて、それを高齢者が修理をし
ています。それをうちから持ってきたらなくなったおもちゃと交換する。壊れたものを直し
て、お金に交換するのではなく、“物換”というスタイルをとるわけです・・・

●2009年4月～6月・・・別府現代芸術フェスティバル2009「混浴温泉世界」開催

platformなどを会場とした別府市街地全域で“複合型”の国際芸術祭を市民主導で実施
若手アーティスト「未来美術家」遠藤一郎も参加。65日間開催。

A: アートゲート・クルーズ(国際展)・・・芹沢高志をディレクターとして8組のアーティストが集結。
(参加アーティスト達は、別府に居住しない人たちで、まちなかで「場所」を発見し、そこをアートの現場に変えていくというもの。)

B: ベップダンス・・・佐東範一氏がディレクターとなり、ボリス・シャルマツツなどのアーティストが
公民館や商店街などでダンスプロジェクトを実施。
サイトスペシフィック(特定の場所で機能する作品)なダンス作品の公演。

C: わくわく混浴アパート(国内展)・・・戦後すぐに建てられた古いアパート 22 部屋で、国内のアーティストたち132組が、滞在・制作・展示・交流を行った。柏のわくわくの源。
遠藤一郎・浦田琴恵のアーティスト達がコーディネートする。

(山出氏)・・・大家さんは 80 歳を超える高齢の方なのですが、その場所で2ヵ月間アーティスト達が夢を語り、制作する意義を話しましたところ、安い家賃で貸していただくことができました・・・アーティストたちは、遠藤君のネットワークがあって全国から集まってきてくれました・・・、これが作品なのか？というものも含めて、アパートの中に次から次へと作品を展示していきました・・・、(笑)、この布団の写真ですが、淡路島に住んでいるアーティスト兼布団職人の土井君が作ったもので、お客さんが疲れて寝ているんですね。生活と芸術が混在しているんですが(笑)、作家とお客さんが作品を通じて交流しているんです・・・。

<「混浴温泉世界」が生んだもの>

- ・「混浴温泉世界」の経済効果・・・メディア露出度を換算すると約28億円。
- ・性別・年代別データ・・・女性客が増えた。別府が苦手としている客層(20～40 代の女性)を県外から呼び込めた。
- ・出品作品が別府に残り、継続展示が行われたり、教科書で取り上げられる。
例)平成24年度の中学校美術教科書に掲載予定・・・マイケル・リンの壁画
- ・平成21年度文化庁長官賞受賞(別府市が受賞)・・・市民による芸術活動が認められる。

(山出氏)・・・別府というと、20年前までは、観光地、歓楽街、温泉の町なので、圧倒的に団体客・男性客が多かったのですが、このイベントによって、女性客が増えたのです。アートの世界では女性が多いのはあたりまえなのかもしれませんが・・・

●2010年11月・・・「ベップ・アート・マンス2010」開催

・2012年開催予定の「混浴温泉世界」を見据えての企画。「混浴温泉世界」のスタッフで実行。

・「ベップ・アート・マンス」とは？・・・地域の活動団体、小規模文化団体への中間支援システムを確立することを目的としている。広報のバックアップ、事務局代行などの支援を行い、小さな団体ができないことをサポートする。登録型プラットフォーム事業スタイル。
起業する人たちを応援するスタイルである。
横の連携の創出。

例)煎茶会と竹工芸、EnjoyHula In 別府、カラカラわたしのベップ

(山出氏)・・・「混浴温泉世界」によって、音楽やダンスなどのアートイベントを実施する、いろいろな団体が生まれてきたわけです。ベップ・アート・マンスは、助成金は出さないけれど、パンフやプレスリリースの作成などの広報協力や、問い合わせや予約窓口の代行など、彼らが活動しやすくなるようにお手伝いをしてあげる・・・という形です。

- ・BP(金券)の導入・・・アート+飲食+マッサージなどのサービス+別府土産の購入+温泉+観光施設めぐりが可能となる金券の登場。
- 500円で6枚(=6BP)つづり。6BPのうち、1枚(1BP)はアートイベントの専用チケットになっている。
- 残り5BPは土産や飲食店で使える。別府の町を堪能できる金券。

●2010年11月3日～7日・・・「混浴温泉世界シンポジウム2010」開催

- ・市民主導型のオープンな場所で次の段階をどうしたらよいかをみんなで考えるイベント
- ・円卓会議スタイル、Twitterの連動、Ustreamで公開放送
- ・ゲスト・・・日本政策投資銀行職員、「デフレの正体」を著した藻谷浩介氏や金沢21世紀美術館長の秋元氏を招く。

●今後の BEPPU

- ・ポータルミュージアムの構築・・・無料の季刊誌を発行。広告は掲載せず。
- ・BPの定着化
- ・空き店舗の有効活用・・・アーティストの居住・制作の場所として。(アーティスト・ビレッジ)
- ・市街地全体が生涯学習の場へ

II. 藤田とし子氏(株式会社 全国商店街支援センター事業統括役)

「まちづくり・活性化の手法としてのアートイベント」

①柏の中心市街地活性化ーまちづくり10年(1988年～)のキーワード

- ・98年に「柏駅周辺イメージアップ推進協議会」が設立された。
- ・柏のイメージは？→文化が無いまち・歴史がないまち・なにもないまち
- ・イメージアップを図りたい→様々な団体が作られる。

NPO 法人 柏市インフォメーション協会

柏駅周辺イメージアップ推進協議会

GAP

- ・この指とまれ！＝やりたくない人は参加していない・考え方に賛同した人たちが集まる
- ・若手の登用＝若い人たちの思い、汗をかける場所がきちんと整備されていた。
- ・事業者の皆さんがまちづくりの中心に・・・昭和29年・・・柏駅完成→駅ビルを作りたい
昭和30年・・・柏の大火→防火耐建築
昭和48年・・・W デッキ→柏再開発
昭和60年～平成＝事業者中心のまちづくり
98年～・・・「この指とまれ！」＝学生・主婦・起業家・フリーター・柏以外の人たちがアートイベントやまちづくりに参加するきっかけが出来てきた。柏に住んでいること・生まれたこと・通っていること、様々な思い

の人たちが集まってきた。

↓

「JOBAN アートラインプロジェクト柏」「柏兄弟」「ストリートプレイカーズ」など多様な団体・グループが結成され、柏の活性化につなげてきた。

一方、

「団塊の世代や定年後、お金も時間もある世代が地域に戻る時、何をしたら言いかわからない人たちをどのように関わらせたらよいのか？」また、「常磐線の古いイメージをどう払拭するか？（酒臭い車内、ワンカップ酒の電車）」

↓

柏のイメージアップ向上へ・・・地域沿線で協力体制「JOBAN アートライン協議会」が結成。

②JOBAN アートラインの歴史

- 2006年・・・知らない人が出くわす、気づきのアート、アートによってまちを変えたい。
ガイドツアー、プロがアマチュアを指導するイベント、ダブルデッキでのイベント
- 2007年・・・さらにパワーアップ
小学校での木の葉イベント、ハウディモールでのパフォーマンスイベント、
- 2008年・・・寺嶋文化財団から基金→全国からアーティストを呼ぶことが可能→「わくわく」へ
アートの“水平展開”が始まった。郊外へ拡大。
スタンプラリー実施。街中に点在するアートを訪ね歩く。
柏のまちの再認識のきっかけ。

柏市民活動推進課が千葉県から資金を引っ張ってきた

↓

「千葉県地域活性化プラットフォーム事業柏」・・・市民活動団体と連携・アートをツールに。
芸大・渡辺教授の指導のおかげで飛躍、成功を収める。（かしわジモト project）
日経 MJ 流通新聞に全面掲載される。

③新たなまちづくりの方向性は？

アートに可能性があるのかも？？？→刺激・興奮・インベーションが与えられる。
「地域イメージ・地域ブランド」を創出へ

Ⅲ. フリートークコーナー（中村政人 × 山出淳也 × 藤田とし子 × 清水義次）

清水：中村さんから見て、この2人の面白いところは？また、気になった点は？

中村：山出くんとは、お互いに細いところからの知り合いで・・・」（笑）彼は“プロジェクト意識”がとても強いですね。「チェンマイ・ソーシャル・インスタレーション（国際展）」はタイの作家たちや世界のアーティストたちが自主的に集結したイベントだったんです。地域の人々の思いやエネルギーを集める仕事を山出くんがしていましたね。このようなことをするためには、大胆さや繊細なリテールが必要だと思うのです。日本では、行政がやらない文化サービスをここまで具体的にいうのは、山出くんがアーティスト的な資質があるからだと思います。

清水:プロジェクトを起こすには莫大な資金が必要ですが、山出さんはどうやって集めているのですか？

山出:別府に関して言えば、「BPPドクトリー」を発行しようと考えています。僕は“アートが地域の中で繋がっていくことが必然化する”ための種をまいているのです。それが、platform 事業。それは、まちに必要性を感じさせて、残していかなければならないのです。資金は38%助成金やBP グッズの販売、金券の発行、アーティスト作品の販売などでしょうか。話はそれますが、1月からのスタートの予定ですが、“情報の提供”を考えています。情報案内サービスですね。“まちのここに行けばよい”という場所を作るんです。情報発信として、フリーペーパーの発行です。これは、広告なしでいきます。年4回の発行を予定しています。“まちを横断的に楽しむ”ことの実行です。

清水:山出さん、次から次へとすごく面白いことをしているのですが、なぜそれをしたいのですか？動機は？

山出:僕は海外で仕事をしていたときに、ネット上で“別府が面白い”という記事を偶然発見したんです。それは、全官公庁長官が書いたもののひとつだったのですが。別府では路地裏散策を行っていて、それはたとえ参加者が1人でも実施するというものでした。これに僕は非常に衝撃を受けました。40代・50代のリーダーがとうとう出てきたなど。個人へのサービスを考える人が出てきているのだと。僕はすぐに別府市役所に国際電話しました。(笑)そして、自分が子どもの頃を思い出したんです。みんなが浴衣着ていた賑やかなまちを。それがバブルの後にどんどん無くなっていく……。帰りたいあの場所に、アーティストたちがどんなものを作り上げるのかをどうしても見てみたかったんです。強烈に見たかった。それから、急遽、日本に戻りました。(笑)僕は、絶対、見たいものが見れるまでは、絶対諦めないんですよ。(笑)それが原点ですね。(笑)こだわるのはそこですね。非常に個人的です。(笑)

中村:藤田さんの話にもあったけれど、JOBAN アートラインの中で芸大という言葉が出てきますが、地域でアート活動をしている人たちの可能性や意識をどのように OPERATE するかだと思います。山口の県展の審査に行ってきたのですが、サイズ・出品するもの自由という枠にとられないスタイルのものがあります。手芸も書道も絵画も陶芸も、すべてみんな同じに扱われるんですね。審査会は公開審査で、みんなの前で○とか×とか言われちゃうんです。(笑)その場において、僕は思ったんですが、芸大とか芸術とか、無意識のうちに自分たちの意識が雲の上に行っていたような気がしました。特別な意識を持ちすぎているのでは？と感じました。何の美術教育も受けていない、市民レベルのアート活動者に対して、我々は何もしていないなと思いました。このような人たちに発表の場を設けるなど、チャンスや機会を与えるのは行政や民間、商工会なのではと。やはり、連携していかないと解決できないと思います。多分、日本全国で眠っている市民アーティストはかなりいると感じました。

清水:藤田さん、中村先生・山出さんの発表を聞いて、アートライン柏の立場からどのように思われましたか？

藤田:柏のアートラインは規模も形もまだまだ足元にも及びませんが、考え方は全く同じだと思います。中村先生の言葉の中に、とってもいい表現があって。“アートイベントの作品を経験した後でうす〜く気がつく”というのがとても印象的でした。

その場所に長く住んでみると、だんだん当たり前になってきて、そのまちの魅力とかが気がつくことがなくなって、わからなくなるんです。それをどうやって、発見するのか？気づくのか？気づかせるのか？まちの活性化には必要なことだと思うのです。アートラインでは、はじめ、本当に申し訳ないのですが、芸大を使っちゃったんですね(苦笑)芸大生のためのステージというわけではないのですが、わかりやすくイベントを仕掛けていかないと、みんながそれに賛同してくれないの

です。まちへの思いを表現したい人、チャンスがない人、発見したい人などをかき集める方法はないのかなとずっと思っていたんです。難癖つけられないものをまちにもってきたいなど。チャンスとしてJOBAN アートラインにのせて、仕掛けをさせてもらったわけです。

このまま、柏は持続可能なのか？商業のまちとしてやっていけるのか？ふるさとがなくなってしまうという現実。魅力的なまち・柏になるよう、いろいろな方にご協力を頂きました。だからこそ、最初からあえて、有名人は呼んでこなかった、しょぼいと言われたのですが、あえて、柏らしさを紡いでいくためには、みんなが参加できる、敷居の低さも含めてやってみました。

清水：3人の話を聞いていて、わたしも思うところが出てきましたので、お話をさせてください。

IV. 清水義次(都市・地域再生プロデューサー)

「アートイベントが地域に沁み込む～CET ケーススタディ～」

①CET(Central East Tokyo)とは？・・・2003年から毎年秋に開催される10日間のアートイベント
2003年から始まる。神田裏日本橋の疲弊をなんとかするためのプロジェクト。
アートイベントでまちづくりを考えたもの。

清水氏のテーマ・・・アートイベントはあくまで、まちづくりの一要素である。

アートイベントが地域に沁み込むにはどうしたらよいか。

CET の内容・・・空きビル・空き室・空きスペースを有効活用し、テンポラリーなギャラリー街をつくるイベント。多数のアーティストと学生ボランティアなどの人々が参加している。デザイングッズの制作と販売、ショップの開設、シンポジウムやワークショップの開催などを行い、多数のメディアでも取り上げられて、知名度は上昇中。2003年度からの活動状況や団体としての考え方などは、本として出版されている。(晶文社より)

<重要となるキーワード>

“複線型でプロジェクトを走らせること”

→お金がない地域から面白い情報を発信していくには、デザインイベント。

Tokyo Designers Block Central East = 青山・表参道のイベントを東東京に誘致した。

“プロジェクトは個人ではなく、多くの関係者を巻き込んで新しい出来事として展開させる”

→One Of Them である。プロジェクトという考え方を強く意識して行う。

“拠点がエリアごとにあること”

→楽しめる場所づくり。たくさんあること。スペースを常に使えること。柏にも必要。

②CET と大事なコミュニティ

・「通過儀礼」をまず先に・・・神田に古くから住む地元民と新しく入ってくる人の交流会を開く。

例)バーベキュー大会を実施・・・文化女子大の生徒30名も動員しての盛大な交流パーティで、お互いの敷居を取り除く。目的意識の再確認。(東神田路上パーティ)

③CET を運営する人たち・・・大学生・大学院生を中心にした活動。毎年、増えている。

学生たちの目つきが変わっていくのがうれしい。
アーティストとの交渉や不動産オーナーとの交渉で、学生たちが
社会とかかわり、その責任を果たして成長しているのを感じた。学
生たちが神田に住みだして、交流の場を作り出している。
(神田和泉町鉄柱プロジェクト)

④CET にクリエイターと起業家の参入・・・クリエイター×地域の人々のイベントの実施
地域企業とクリエイターのコラボ商品開発
例) デザインスリッパ、洒落た掃除道具など。
掃印ブランドの開発・・・掛け不精ほうき 5250 円

⑤次から次へと展開が進む CET・・・ギャラリーがオープンし始める。
古くて汚いオンボロビルの「アガタビル」に café とギャラリー
FOIL ギャラリー・武蔵野美術大学ギャラリー
TARO NASU GALLERY
多数の個性的なギャラリーが出来る。

⑥CET の活動がメディアに・・・雑誌や新聞などに特集が組まれ、注目エリアになる。
エリアイメージの確立→おしゃれな場所
CASA・BRUTUS・METRO.MIN などに掲載。

⑦CET から3331へ・・・廃校となった千代田区立旧練成中学校を改修。「3331ArtsChiyoda」
2010年6月26日オープンした。CET と中村政人のアートの合体。
都市公園と中学校の境の塀の撤去し、一体的に利用。
多彩なアート活動が展開されている。

↓

このような活動が全国で展開されるとよいと考える。

⑧総括・・・何が大事？拠点づくりが大事！

・人の集まる「会所」がまちなかにエリアごとに多数あること
遊休不動産を活用してインキュベーション施設をつくる
↓新しい都市型産業の創出・文化を形成する。
例) 東神田プロジェクト「泰岳」・・・人々が集まる場所に。Café・スタジオなど

・まちの魅力となるコンテンツ・・・フィールドワークを継続するとまちを見る目が変わる。
こしかない店・グッズ
クリエイターの住む町
動物磁気をもつ人々が集まるまちなどなど

・都市の文化は産業へ・・・柏ならではのものが必要な時期にきているのでは。
特別な人たちだけのものではなく、みんなが楽しめるもの
都市の文化を行政なども政策のひとつとして考えなくてはいけない。
雇用の創出にも繋がる。

(中村談)アーティストとまちを繋げることのできるコーディネーターが圧倒的に不足している。すべてをマネジメントできる人が必要だと思う。例えば、柏でそのような人材を育てる場所を作るとか……。アートツールにして街づくりをしたいと考えている場所はたくさんあるので、ニーズ有り。そのような人たちを育成して、柏から派遣していくのもいいと思う。

V. 会場からの質問

<質問1>感性を磨くトレーニングを教えてください。日常の中で出来ることなどないでしょうか？

<回答: 中村>

- ①「自分史」を書いてみてください。…生まれたときからのことを追ってみる。その中に、人生の中でポイントとなる出来事などがあるはず。
 - ②写真を撮ってみる…気になったものを写真に残す作業を行う。
 - ③その写真を分類してみる…よく観察して、仕分けを行う。分類を徹底的に行う。
- ①→②→③の作業を1ヵ月行っていくうちに、自分にとってかけがえのないものが見えてくる。
見ている物を意識する作業は、好きな人ができて、気になって気になって仕方がないのと同じ。

<質問2> 柏に美術館が無いが作るべきなのか、それとも他に変わるものが必要か？

<回答>

中村: 美術館設立には制約が多い。美術館に関しては、3年先まで考える必要がある。資金の面でも企画の面でも。美術館は美術作品を収集・保管する機能を持っているが、これからの時代にあったアートセンターみたいなものも検討してみてもいい。会所的機能があり、情報発信の場所にもなりうるもの。柏であれば、30分も電車に乗れば上野に美術館がたくさんあるわけでもあるし。柏に美術館が本当に必要なのかをみなでよく検討する必要があると思う。柏らしい場所の創設を考えてみるとか。あくまでも市民が考えてみる。

山出: 初期投資は出来るだけ低くしてください。かけるところは人です。人にお金をかけることが大事です。(笑)

以上